

『飢餓海峡』

2014年10月15日

私が観た日本映画の中で『飢餓海峡』が深く印象に残っている。水上勉の小説を内田吐夢監督が映画化した。小説は読んでいないが、映画は1965年に作られているので、神学生の時に観たことになる。先日、テレビで放映され、半世紀ぶりで観た。

物語は、次のように展開していく。三国連太郎が演じる犬養太吉は網走刑務所を出所した二人と知り合う。二人は北海道の岩内で、質屋を襲い、大金を奪い、夫婦を殺し、放火して逃走する。岩内は大火災になる。犬養がこの犯罪に関与したかどうかは分からないが、三人は函館まで逃げる。時折しも、台風によって、青函連絡船が遭難し、海岸は救助活動でごった返していた。その隙に、三人は小舟を借りオールで漕いで、下北半島に向かう。

私は北海道に一度行った。連絡船から見た津軽海峡は相当大きな海峡であった。函館出身の友だちに、津軽海峡をオールで漕いで渡れるかと聞いたところ「できない」という返事だった。犬養は大男で怪力という設定になって、渡り切っている。その途中、三人は奪った大金を巡り仲間割れの喧嘩をして、犬養だけが生き残り、質屋で奪った大金を自分のものとする。下北半島に着いて、証拠隠滅のために舟を燃やす。伴淳三郎が演じる弓坂刑事は、岩内での夫婦殺害と放火犯を執拗に追い続ける。伴淳三郎は喜劇役者であるが、シリアスな刑事役が見事である。

青森県に逃亡した犬養は、ある女郎屋で、左幸子が演じる杉戸八重という娼婦と出会う。この映画を観て、左幸子のファンになった。極貧の中で育った犬養と貧しい環境にある八重は優しさを交わし合う。犬養は八重に大金を与える。八重はそのお金で借金を返し、新しい生き方を求めて上京する。娼婦から抜け出られたことを喜び、犬養を深い愛情と感謝をもって慕い、女郎屋で切った犬養の親指の爪を肌身離さず持ち続ける。

八重は上京したものの、喧嘩、窃盗が絶えない戦後の荒れた状況の中で行き詰っていく。そして、娼妓に舞い戻る。彼女は犬養に焦がれ、ひたすら感謝をしたいと思いつける。そのような時、新聞に載った顔写真に見入る。名前は樽見京一郎となっているが、貧しさから救ってくれた犬飼の顔である。樽見は舞鶴で食品会社を営む社長で、福祉や犯罪者の更生のため、多額な寄付をする富豪である。八重は樽見は犬養であると、顔写真の載った新聞を切り抜いて、舞鶴を訪ねる。樽見は私は犬養ではない、あなたを知らないと言い張る。しかし、爪を切った時に見た指の傷痕から、犬養であることを知る。あなたは犬養だと言い寄った時、抱きしめられて首の骨を折られて、殺される。八重は感謝を言いたいだけであったが、樽見は岩内での犯罪捜査が再燃することを恐れて、殺してしまう。それを目撃した書生も絞殺する。八重と書生の心中と見せかけ海に放棄するが、彼女の遺体から、持っていた新聞の切り抜きが見つかる。更に、遺品の中から、持ち続けていた犬養の親指の爪が見つかる。高倉健が演じる刑事が樽見を追い詰めていく。追う高倉健と逃げる三国連太郎とのやり取りは迫力があつた。岩内での殺人、放火の犯罪に関係したか、仲間割れの喧嘩は正当防衛であったか、確かなことは分からない。樽見は北海道に連れて行ってくれ、そこで、すべてが分かると懇願する。北海道に向かう青函連絡船の上から、死んだ人を吊う花束を投げる時、海に身を投げてしまう。真相は闇の中に消えていく。

この映画にどうして感動したのだろうか。貧しさと優しさに共感したのであろう。貧しさは悲しく、自分自身と共に人を肯定できなくさせる。しかし、人の痛みに寄り添い、いとおしむ心も生み出す。『飢餓海峡』には、貧しい者の苦悩と人を愛したい熱い思いが巧みに描かれ、観る者を魅了する。